

“脱線” のすすめ

江口, 巧
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7410598>

出版情報：英語英文学論叢. 76, pp.83-87, 2026-03-18. 九州大学大学院言語文化研究院英語科
バージョン：
権利関係：



“脱線”のすすめ

江 口 巧

今から遡ること40年以上も前、私が大学4年次に受講した「英語科教育法」の中で担当の先生が言われた言葉である―「高校生の集中力は15分以上続きません」。当時は大学卒業後に高校の英語の教員になる選択肢もあり、必修科目としてこの授業を受講したのだが、結果的には研究者になる道を選び、大学の教壇に立つことになった。それでも今日に至るまで、私はこの時の教えを念頭に置きながら授業を実践している。

上の言葉に込められた意味は、授業では長く続かない生徒の集中力を持続させるよう自分で工夫をなさいというものである。上記の科目を受講後、教育実習として赴いた母校の高校では、生徒の反応は私の予想と異なっていた。生徒にすれば、いつもの教員とは違う年齢の近い先生から授業を受ける新鮮さ、また初めて教壇に立つ“教師の卵”に対する好奇心もあろう、生徒たちは50分間集中力を切らすことなく私の授業に耳を傾けてくれた。ところが、大学院修了後に着任した私立大学では、先の先生の言葉の意味を実感することになった。授業開始から20分、30分経過すると学生の集中力が薄れていくのが目に見えてわかる。中には襲ってくる眠気と必死に闘っている学生もいる。そしてこの状況は、現在の勤務地の九州大学でも変わらない。入学直後に見られた目の輝きが、月日の経過とともに徐々に失われていくのである。

以下は、こうした傾向への対応策として私が大学の授業の中で行ってきた実践例である。そして、私なりの提言も含んでいる。

初めに、これから話を進めていく上で断っておかなければならないことがある。この文章に「“脱線”のすすめ」というタイトルを付したが、これは文字通り授業からの脱線を勧めるものではない。学生の興味を引きつけようと授業内容と無関係のことをむやみに話すのは勧められたものではない。しかも、これが5分、10分とだらだらと続くと、学生の視線は冷ややかなものに変わる。ここで意図されているのは、授業途中にはさむ適度な余談である。授業では学生が疲れてきたと思われる頃合いを見計らって、授業内容と関連した余談を挿入するのが一つの策であ

る。例を挙げると、テキストに月名が出てきたら、英語ではなぜ9月以降12月まで、本来の数字の意味から2つずれた月名が使われているのか(Septemberに隠された本来の数字は7であり... Decemberは10である)、あるいは数字が出てきたら、英語では10の位はthirteen, fourteenのように“...teen”という語形が普通であるが、なぜeleven, twelveはそのような基準から逸脱しているのかについて語源に遡る話をするといった具合である。また、英単語の綴りに関して、同じ「ン」という音に対して、英語ではなぜn表記とm表記があるのかといった話も、自分自身が英語を習いたての頃に疑問に思ったエピソードを交えて話すと学生の関心を引く。このためには、ネタとして使える引き出しをいくつも持っておくことが必要になるのは言うまでもない。

授業の適切な時間帯に挿入するのは余談だけではない。授業中に予定しているスケジュールも行うタイミングを考える。例えば、前回の授業で行ったテストの返却。この時学生の意識は相当に覚醒しているので、これを授業開始時に行うのはもったいない。学生は最初の20～30分は集中しているので、これをうまく活用し、集中力が切れそうなタイミングで答案の返却を行う。これによって学生の集中力はupdateされ、その後の授業を再び効果的に行うことができる。

学生の集中力を引き付けるのに、上に述べたような余談等に頼らず、かつ授業内容からも逸脱することのない効果的な方法は、学生に何らかの活動を行わせることである。英語をはじめとする語学のコースが単なる講義ではなく、演習となっているのも十分にうなずける。さらには、学生に知的活動を行わせながら、同時に他の学生とinteractさせること、これがより効果的となる。例えば、九大英語科で編纂した上級レベルの*Authentic Reader*を教材に用いている「学術英語アカデミックリテラシー」の授業では、単にこちらが説明を施すだけでは学生が本当に理解しているという保証ができない。テキストの難解な箇所では、私は学生同士で討論させた上で答えを導き出す機会を提供している。これにより、学生の集中を促すだけでなく、彼らの内容理解を保証することにもつながる。また、リテラシーの授業はreadingおよびlisteningが中心となるが、これとは別にspeaking practiceの機会も与えている。こちらが提供するテーマに関して、ペアを組んだ学生同士で、それぞれ英語で90秒間自分の意見を述べさせる訓練である。この作業に学生は集中力と緊張感

をもって取り組んでいる。その後は、教員の側でテーマに関連する表現例を紹介する。学生にとっては今自らが取り組んだ課題に関する表現であるので、それらを修得しようとするモチベーションは極めて高い。このように学生の意識が高揚した後で再びテキストの読解に戻るが、この時点での学生の集中力は相当に高まっている。この speaking practice も学生が reading に疲れ出したと感じられる頃合いを見計らって行くと、より効果的である。

学生の集中力を維持するには、上に述べた speaking practice がより効果的であることは、今年度からスタートした「学術英語アカデミックライティング」でも感じている。このコースではメインとなる academic paper writing とともに、もう一つ writing for fluency の作業を学生に課している。これは文法や英語の正確さにとらわれることなく、思い浮かぶアイデアをなるべく多く文字にしていく作業であり、授業の最初と最後に課している。ただ、このコースでは、エッセイの構造や引用のやり方等についての説明も必要となり、この教員から一方向の解説の段階で学生の集中力が落ちていくのを感じることもある。そうしたタイミングで関連するテーマの pair talk を課すと、途端に学生の活気が蘇ることを実感する。このように、コース本来の指針を大きく逸脱しない程度に他の学生との interaction の機会を提供することによって、より効果的な授業実践が可能になることを実感している。

学生の集中力の維持という観点から、最後にもう一つ提言をさせていただければと思う。前期に開講された新カリ科目「学術英語インタラクティブ」はコースの目標が学生に英語を使ったグループワークなど、文字通り interaction の機会を提供するというものであり、そして、そのために教員の側の主な使用言語は英語とされた。従来の英語カリキュラムで設定されてきたコースの指針と画期的に異なるものであったため、どのような授業形態にするか春休みの段階からあれこれ頭を悩ませた。この授業で私が使用するテキストは SDGs に関するものであったため、学生には SDGs に設定されたそれぞれの goal を理解させることも授業目標のひとつであった。同時にそれに関連したテーマでグループ討論などの活動を行うという大まかな計画を設定した。ただ、SDGs というある程度なじみのあるテーマとはいえ、それらに関する日本・世界の現状、および問題の解決策などの確認をすべて英語で行うのは幾分無理があると

思われた。そこで、割り切って SDGs の概念理解に関する部分は日本語を介し、flipped learning の一環としての自宅学習を確認する小テスト、SDGs に関するペアトーク、グループ討論はすべて英語で行うというように、二つの言語を使用する時間帯を明確に区分した。このような形態をとると、日本語を介したテキストの概念理解の部分で集中力が薄れかけた学生が、ペアトーク、グループ討論となると、討論方法やテーマを英語で提示する教員の言葉に真剣に耳を傾け、また仲間との討論にも積極的に参加した。つまり、同一言語での継続した授業実践よりも、時折異なる言語への switch、特に英語への switch は学生をより覚醒させる効果があると感じられた。

英語一辺倒による90分は、学生の立場からすると相当な試練かもしれない。先に述べた「学術英語アカデミックリテラシー」で、*Authentic Reader* のリスニング教材は、英語による5～6分の長さの講義を聴く形式となっている。この長さでさえ、授業でのリスニングでは、途中で忍耐力が切れたのか、あるいは難解な聴解に耳が閉じてしまったのか、集中力の切れかかっている学生が見られることがある。こうしたことから、90分の授業時間を通して継続的に英語を聴かせることも重要ではあろうが、学生の集中力の維持という観点から見ると、途中途中で短期集中的に英語を聴かせた方がかえってより効率的ではないかとさえ感じる。最初に触れた大学時代の「英語科教育法」の先生も、授業はもちろん日本語で行われたが、授業中に2度3度英語を使用される時間帯があった。その時、私たち学生は先生の英語を一語も聞き漏らすまいと神経を集中させていたのは言うまでもない。

要するに、「“脱線”のすすめ」というテーマで私が訴えたかったのは、適切な余談や学生同士のインタラクションの機会提供を通じて、授業の内容やペースに変化をもたせ、メリハリのある授業を行うことの勧めである。また、それらを提供する時間帯をも考慮することによって、学生の集中力をより長く維持することが可能になるというものである。もちろん、このような意見に対し、学生にとって魅力ある授業を行うためには、どのように授業を行うかではなく、授業運営のより核心的な部分、つまり何を提供するかに注力すべきであるという議論もあろう。言うまでもなく、私は授業の準備においては、後者の方に時間と労力の大部分を割いている。しかし現実的な問題として、聴講しているすべての学生

が勤勉であるわけではなく、こちらがどんなに工夫した教材と作業を準備して臨んでも、90分間を通して常に神経を研ぎ澄まされていられる学生は多くはない。そのために、授業実践においては、教員の側も学生の反応を読みながら、それに応じた対応が求められる部分もあると思われる。同じ学期に同一のコースを複数クラス担当した場合、最初のクラスでの授業の反省を踏まえて、後のクラスでは、学生の反応を見て、教材や作業の提示の仕方、またそのタイミングを変えることで成功する例は誰も経験したことがあろう。そうした小さな工夫が学生の集中力を高め、ひいては理解力の向上につながることは否定できまい。

先日私が手に取った私自身の英語学の研究ノートにたまたまこういう例文を見つけた。“If some students look blank in your class, it means they are not following you.” 単純ながら的を射た言葉である。この言葉を肝に銘じて、今日も教壇に向かう私がいる。